

製鉄作業の中心地「高殿」

今はひっそりと佇む高殿だが、かつては菅谷たたら山内の賑わいの中心であり、製鉄用の炉では火が燃え大勢の作業員が働いていた。また、この高殿は、宮崎駿監督のアニメ『もののけ姫』に登場する「タラ場」のモデルになったといわれている。

実際に製鉄が行われていた 1921 年まで、操業に先立って高殿の中に毎回新しい炉を作り、三日三晩の操業が終わると炉を壊していた。1 回の製錬は 3 日 3 晩続き、その間、作業員はほとんど休まなかった。村下（むらげ、操業を統括する技術責任者）の監視の下、作業員たちは交代で炉に砂鉄や木炭を投入し、ふいごを使って空気を送り込んだ。

炉への投入は村下と助手の重要な仕事であり、轟音を立てる炎に砂鉄と木炭を少量ずつ交互に繰り返し投入した。この投入の正確な量とタイミングを説明したマニュアルはなく、一連の製錬作業がうまくいくかどうかは、色、音、匂いを判断する村下のノウハウにかかっていた。

この高殿にあるふいごは 1906 年に作られたもので、水車によってピストンを動かし、地下の土管を通して炉に空気を送り込む。1906 年以前は、炉の横に並んだ大きな足ふいごを使っていた。ふいごを動かすのは二人組の作業員で、ふいごの上に立って一定のリズムでペダルを踏んでいた。

ふいごからの空気も加わり、炉の炎は 1 メートル以上の高さには達した。屋根は開放されているため、火事になることはなく、煙は風に流されて消えていった。

高殿内部の配置

現在の高殿は、1851 年に焼失した後に再建され、中央にある長方形の粘土炉は、1967 年に建てられたものだ。正方形の平屋で、一辺が約 18 メートル。屋根の高さは 9 メートルで、中央にある炉を囲む 4 本の柱によって支えられている。

（建物の入り口から炉に向かうと）左右にある高い台は、何日もかけて行われる製錬の間、村下や年長の作業員が休む場所であった。炉の真後ろは砂鉄を貯蔵する場所で、木炭はその両側に山積みになっていた。

目には見えないが、この作業場の重要な特徴は、炉の下にある地下の構造物である。建物自体が造られた後、作業員たちは炉を設置する場所に深さ4メートルの穴を掘った。炉の真下には木炭で満たされた大きな穴が1つ、そして空っぽの小さな空間が2つある。これらの空洞は、断熱（炉の保温）や湿気を発散させる役割を果たしていた。余分な湿気は炉内の温度を下げたり、最悪の場合、蒸発して水蒸気爆発を引き起こす可能性があるからだ。